

「新型コロナウイルス感染症と 子どもたちの置かれている状況」

日本小児科医会公衆衛生委員会担当理事

埼玉県小児保健協会会長

医療法人自然堂峯小児科 理事長 峯真人

2021年2月3日 日本小児科医会 記者懇談会

子どもたちの新型コロナウイルス感染症の特徴

今までのところ、子どもたちにとっての新型コロナウイルス感染症は

- ・「通常の社会生活上では**懼り難い**」
- ・「通常の社会生活上では**うつし難い**」
- ・「かかっても**重症化し難い・むしろ多くは無症状**」

らしいことがわかってきました。

一方日々メディアなどから流れてくる、多くの新型コロナウイルス感染症の情報や、流行の状況による子どもたちの生活や行動の規制などにより、多くの子どもたちの体と心に様々な悪い影響が出てきています。

感染症としての影響よりもはるかに大きく、しかも長期にわたる可能性のある影響について、私の診療所の受診状況をもとにお話したいと思います。

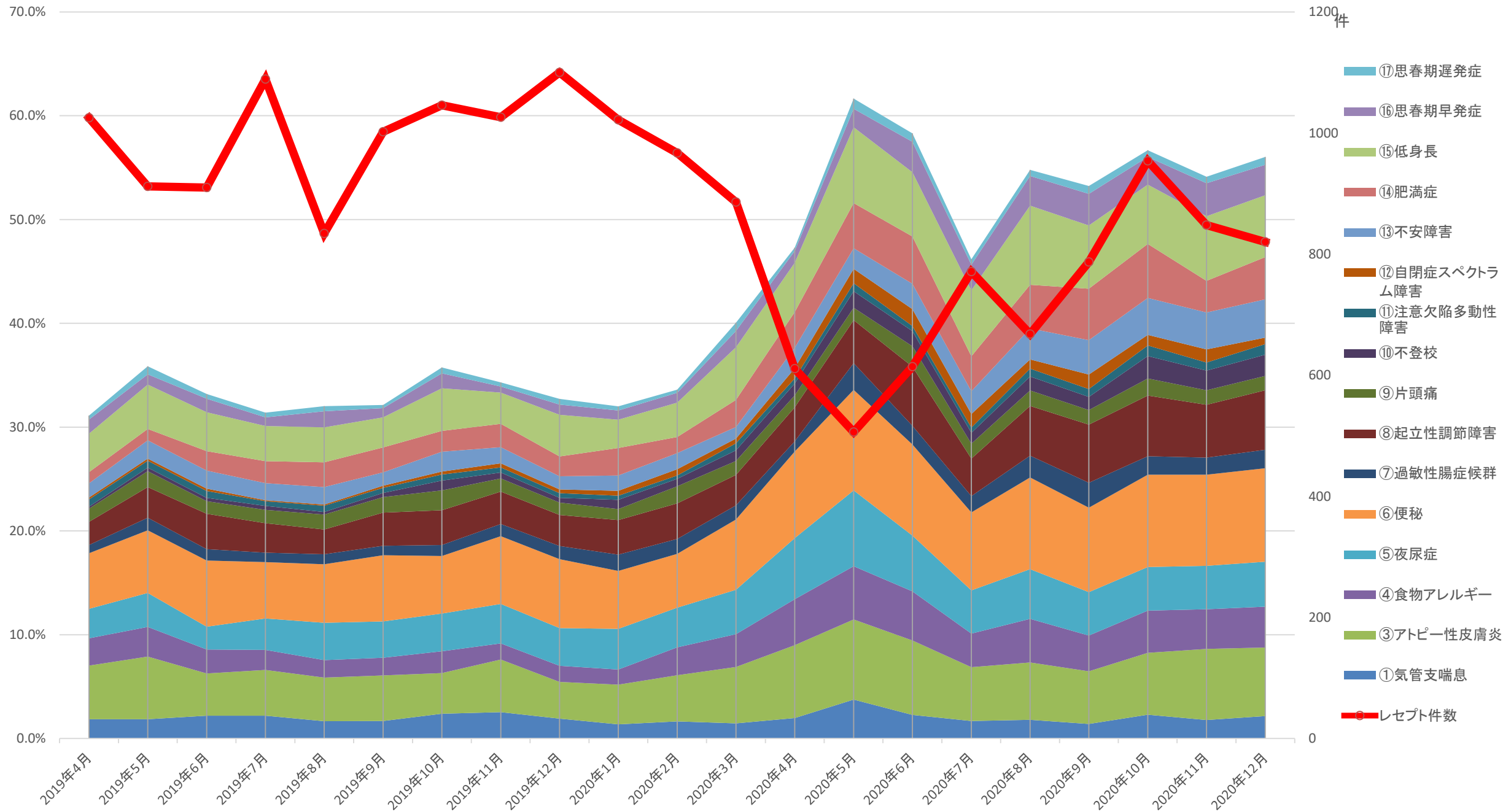
峯小児科の診療形態の特徴

- お母さまのお腹の中にいる赤ちゃん（胎児）から乳児期、幼児期、学童期、思春期、さらに小児期から当院に受診していた方が成人になり子どもたちの親になった方まで、すべての相談に乗ることを理念の一つとしています。
- 20年ほど前から子ども専門の臨床心理士による「心の相談室」を保険診療で続けています。
- 医師・臨床心理士・看護師・事務職までの誰もが、これらの相談に乗るための一定以上のスキルを持って、訴えを聞き、対応することで「心の相談室」とのかかわりがスタートします。
- 心のケアなどに対応する専門機関や行政機関とも当院各職種スタッフが連携してくれています。

コロナ渦での子どもたちの受診理由の変化

- 受診患者数が激減、特に感染症による受診者は明らかに減少
- 予防接種（個別接種）の受診者は横ばい（集団接種では減少も）
- 乳幼児健診（個別健診）の受診者は横ばい（集団健診では減少も）
- 不定愁訴（だるい、頭が重い、眠れない、起きられない、食欲がない、ドキドキする、めまい、立ち眩み、疲れやすい、ものが飲み込めない、腹痛、便秘気味、繰り返す下痢、なぜか涙が出るなど）による受診者の増加
- 肥満、痩せなどの摂食関連の相談での受診者の増加
- 無口・多弁、吃音、寝言などが気になる相談での受診者の増加
- 自閉症スペクトラム障害、AD/HDなどの児の症状悪化による相談の増加
- 家庭内暴力、リストカットなどの問題行動の相談の増加
- 今まで気にしていなかった症状（低身長、思春期早発、夜尿等）での受診者の増加

レセプト件数に対する病名別割合推移(コロナ下での推移2019年4月～2020年12月)



子どもたちにCOVID19が及ぼす影響を理解してもらえましたか？

- 今のところ子どもは、「罹り難い」「うつし難い」「重症化し難い」らしい
- しかし**非常に変異し易いウイルス**なので、今後も常に注意が必要
- 子どもの**親世代の感染**が増えているので、注意喚起が必要
- 教職員、指導員、保育士など、**子どもに係わる関係者の感染予防**は必須
- COVID19感染症以外の病気や、**様々な訴えに耳を傾け、適切に対応することは極めて重要**
- コロナ渦が子どもたちに与える**影響を見極める「目」を持つことが重要**
- COVID19の流行により、**既に生じてしまった影響への対応と、今後影響を拡げないようにするための対策**は極めて重要
- 子どもたちの周囲の**大人たちによる、経験と感性に基いた気づきや判断は、子どもたちとその家族の未来までも救うことになるはず**
- この時こそ、子どもたちの代弁者である小児科医の果たす役割は極めて大きい